



○「自立とは？」

先日、海老原宏美さんの最期の講演を録画映像で視聴する機会がありました。映画「風は生きよという」の主人公でもある彼女は、映画の出演者紹介によると「1977年神奈川県出身。生後1年半で脊髄性筋萎縮症と確定診断を受ける。小学校から大学まで地域の学校に進学し2001年の韓国縦断野宿旅で障がいが重度化、02年より人工呼吸器を使い始める。01年より東京都東大和市で自立生活を開始…」という方です。脊髄性筋萎縮症とは、体幹、腕、脚などの運動をつかさどる脊髄の細胞に異常が生じることで、筋力低下と筋肉萎縮が生じる病気で、乳児期の発症が重症化しやすく、自分の力で呼吸ができなくなるため人工呼吸器が必要となるそうです。この人工呼吸器からの風が生きよと言っているという意味での映画タイトルです。



人生の礎とはなにかという話の中で、「かわいそうな子でなく、少しでも社会の役に立つ子になってもらいたい。少しでも自立した人生を歩める子になって欲しい。」という親の願いや期待もあって、自立のためにがんばったことが人生の礎となったという話がありました。それは、自分にかかけられる期待そのものが、自身の存在の肯定にもつながったという意味だと理解しました。

就職や進学面接や志望理由書の中で、「人の役に立ちたい」というフレーズをよく見聞します。ここで使う「人の役に立つ」の意味は、人に助けられている面と人の役に立っている面があるとすれば、人の役に立っているとの実感が大きい状況をイメージされているかもしれません。また、「ありがとう」と言ってもらえる仕事などがイメージされていることも多いと思います。仕事によっては、「人の役に立つ」が、「社会の役に立つ」とか、「ふるさとの役に立つ」というフレーズになることもあります。一方、人に助けられている迷惑をかけているという実感が大きいと、自己有用感や自己肯定感が低くなりやすいと思います。

しかし、役に立つことに大小はなく、またそれが誰かの助けを借りてなしえたことでも意味や意義はあると思っています。そもそも一人ですべてをなしえたり、誰かの役に立ったりすることはほとんどなく、組織やチーム等で取り組んでいることがほとんどです。

海老原さんの話を聞きながら、役に立っている実感があることも「自立」していることにつながると思いました。それは、必ずしも大小の問題ではないということも…。人の手を借りてできることがあれば、それはそれで意義があること。人の手を借りられる勇気をもっていること、それも自立の形の一つであるとあらためて思いました。人の手を借りることに勇気がいります。例えば、道を尋ねることも勇気がいります。でも、尋ねられたり、助けたりすることは、その人の自己有用感にもつながります。見方やとらえ方を変えれば、いろんなことや行為が人の役に立っているのではないのでしょうか。「〇〇してあげている」というような感情を持たず自然と助け合っている。それがお互いのエネルギーになっていくのが共生社会かもしれません。

文部科学省のHPIによれば、共生社会とは「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障がい者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。」としています。海老原さんは、「ここにいて良い条件をつくらない社会」と定義されていました。条件をつくと、条件にあてはまらない人を排除する社会になるということです。その意味を考えかみしめているところです。